

蒙古襲来と仏教版画

佐々木 守俊

藤原兼仲(1244～1308)の日記である『勘仲記』は、兼仲が家司をつとめた鷹司家や朝廷の鎌倉時代後半の動向にかんする重要史料である。本日記の弘安4年(1281)6月14日条は、2度目の蒙古襲来(弘安の役)にたいする異国降伏の祈禱について記す。この記事は相田二郎氏の『蒙古襲来の研究』でとりあげられ、祈禱の一環として仏教版画が制作されたことも指摘されている^(註1)。いっぽう、版画史研究の分野においては注目されてこなかったようだが、制作事情を明確に記す点で興味深い史料であることはまちがいない。まずは該当箇所にも再注目してみたい^(註2)。

この日、兼仲は関白鷹司兼平(1228～94)に召され、馳せ参じた。鷹司家には一門の公卿や家司らが集まり、「異国御祈」にかんする評定が開かれた結果、同月18日より毎日御祈をおこなうことが決まった。これは18日の「新院」こと亀山上皇(1249～1305)、翌19日の「本院」こと後深草上皇(1243～1304)の沙汰に続き、20日に鷹司家の沙汰として挙行されることになった。一連の御祈は、朝廷と関白家が歩調をあわせておこなうものとされたのである。記事の末尾には、「異賊舟三百艘」が長門国(現在の山口県の一部)に襲来したとの情報が京に届いていたことが記される。この緊迫した空気のなか、鷹司家の御祈は計画されたのだった。内容は諸社への百度詣ならびに千度詣、藤原氏の氏神である春日・大原野・吉田の三社での読経、興福寺などでの読経、千座仁王講、「心経」(『般若心経』)ほかの一日書写供養、不動明王・一字金輪・愛染明王の真言の念誦、造像、五大尊護摩供養法と定められた。このうち、造像の詳細は下記のとおりである。

一、御仏造立供養

一字金輪 院恵法印可造進、
不動 三尺、幸円法橋可造進、
印仏 千手観音像千二百躰、

すなわち、一字金輪像を院恵(生没年不詳)、三尺の不動明王像を幸円(生没年不詳)が造進し、さらに「千手観音像千二百躰」の「印仏」が造られることになったのである。一字金輪と不動の造像は真言の念誦と対応するものと察せられるが、「印仏」の尊格に千手観音が選ばれた理由は明確でない。ただし、「御仏造立供養」にさきだつ「読経事(見せ消)」の項には「千手経百卷」の読経を行願寺でおこなう旨が記されており、これと関連するのかもしれない。

弘安4年には朝廷側と幕府側の双方で異国降伏の祈禱が集中しておこなわれ、護国的性格の強い尊格の造像も活発化した^(註3)。この年の現存作例には、「今上皇帝 宝祚長遠 太上天皇 御願円満 異国降伏 日域静謐」の願文を『金光明經』の奥書に記し、像内におさめる東大寺新禅院四天王立像(現在の東大寺真言院像)がある^(註4)。「今上皇帝」は後宇多天皇(1267～1324)にあたる。当時の「太上天皇」は後深草と亀山だが、具体的には後宇多の父で亀山をさすのだろう。『勘仲記』に記される一字金輪像と不動明王像は現存しないが、東大寺像とも通じる性格をもつ造像が少なからずあったことを想像させてくれる。

では、「印仏」について詳しくみてゆこう^(註5)。すでに相田氏はこの「印仏」について、「摺写、即ち印刷すること」との認識を示している。「印仏」は現在の術語ではスタンプ式の小型の仏教版画を意味し、いっぽうで板木の上に紙を載せて摺るタイプの仏教版画は「摺仏」と呼ばれるが^(註6)、ほとけの姿をあらわした板状の法具を虚空や香煙、水面などに押し当てる動作をくりかえす儀礼、またはその法具じたいも「印仏」と呼ばれるので^(註7)、史料上にみる「印仏」が何を意味するかは、それぞれの状況に応じて判断する必要がある。『勘仲記』のばあい、2軀の仏像とともに「造立」の一環と認識されていることに加え、「千二百鉢」と具体的な員数も明記されていることから、かたちの残る版画とみてまちがいない。「印仏」の語は10世紀から史料上にあらわれるが、版画をさすと断定できる用例は少ない。管見の限りでの最古の確実な用例は、仁平4年(久寿元年、1154)に藤原忠通(1097～1164)が安祥寺の実厳(1131～85)に修させた不空罽索法の巻数(『巻数集』所収)にみる、「奉摺 印仏三千五百体」である^(註8)。また、嘉禄2年(1226)の石清水護国寺の放生会について記録する「嘉禄二年八月十一日石清水八幡宮恒例放生会儀式次第進進状」(『宮寺縁事抄』所収)には、「奉供養 印仏三万鉢」の用例がある。これも具体的な員数とともに、「供養」したとの記載があることから、じっさいに版画が制作されたものと考えられよう。鷹司家の「印仏」はこれらの先例に次ぐものであり、版画史研究上の重要性は高い。

ただし、この版画の実態については一考を要する。史料上にみる「印仏」が術語にいう「摺仏」をさす例もあるからである。蓮華王院千体千手観音菩薩立像(現在の妙法院三十三間堂像)に納入された千手観音および二十八部衆像摺仏のうち、再興像のぶんは制作当時「印仏」と呼ばれた(『経俊卿記』正嘉元年〈1256〉9月8日条)^(註9)。いっぽう、康円(1207～?)が建長元年(1249)に造ったケルン東洋美術館地蔵菩薩立像には大量の印仏が納入されていたが、これらはともに納入されていた願書では「摺仏」と呼ばれている。印仏を押捺する行為を「摺写」と記す例も非常に多い。『経俊卿記』とケルン東洋美術館像の願書の例からすれば、術語にいう「印仏」と「摺仏」が歴史的にはそれぞれ逆の意味で用いられたかのようだが、近年、西郷寺阿弥陀如来立像の像内から弘安8年(1285)の年紀をもつ阿弥陀如来像印仏が発見され、その包紙には「阿弥陀如来印形千五百□(体カ)内」と記されている^(註10)。この墨書は、術語にいう「印仏」が制作時に「印するもの」と認識されて

いたことを示しており、鷹司家の「印仏」が技術的にも「印仏」に分類されるものだった可能性を考えるうえでのカギとなっている。

鷹司家の「印仏」は、異国降伏の目的がはっきりしている点に特色がある。仏教版画は個人の日課作善、故人の追善、あるいは勧進の場での使用など、さまざまな目的で制作された。そうしたなかで、密教的儀礼の一環として制作された版画の存在はみのがせない。『卷数集』にはさきに挙げた不空罽索法の例のほかにも、「印仏」の制作を記録する巻数が2点収載されている。これらは修法の場で「印仏」が制作された事実をよくものがたる。菊竹淳一氏は、建暦元年(1211)に聖覚(1167～1235)が「一万体慈恵大師供養」をおこなったとの『天台座主記』の記載を挙げ、慈恵大師像を版画とみるととともに、比叡山の学生が堂衆との抗争を背景に降伏の祈禱をおこなったものと指摘する^(註11)。鷹司家の「印仏」はこうした先例に続くものと位置づけられよう。仏教版画には素朴で愛らしい像容をもつものが多く、一見するといかにも個人の手すさびの作善にふさわしいように思えるが、敵対勢力への対抗措置として組織的に制作されることもあったのである。

鷹司関白家という高級貴族の営為である点も、大きな特色といってよいだろう。忠通を施主とする不空罽索法で「印仏」が制作されたことはすでに触れたとおりで、父の忠実(1078～1162)の日記である『殿暦』にも仏教版画制作にかんする記事がみられる^(註12)。摂関家は平安時代以来、仏教版画制作にたずさわってきたのである。また、後白河上皇(1127～92)の御願による長寛2年(1164)の蓮華王院千体千手観音菩薩立像(当初像)には千手観音および二十八部衆像摺仏が納入され、宝治3年(＝建長元年、1249)の火災後に後嵯峨上皇(1220～72)が再興を命じたさいにも、図様こそ異なるが摺仏の納入は受け継がれた^(註13)。朝廷関係の事例ではこのほか、やはり長寛2年に東大寺大仏殿でおこなわれた公家御祈のなかで普賢延命菩薩の「摺仏」が制作された例^(註14)や、安元3年(1177)に高倉上皇(1161～81)が「御自手摺書」した「大日如来像三百六十軀 十一面観音像三百六十軀」を厳島社に奉納した例(「安元三年御手摺書正軀供養日記」)^(註15)が知られている。仏教版画制作は廉価で簡便な多数作善という性格をもち、その結果、庶民信仰とも結びつきうるものだった。だが、貴顕による仏教版画制作は連綿とおこなわれていたのである。民間に密着した美術としての受容がなされたことはもちろん認めるべきだが、流行の背景には影響力をもつ有力者の関与があったことも忘れてはならない。『勘仲記』の記事は、鎌倉時代の仏教版画制作の場の様相を知るための格好の史料である。蒙古襲来という未曾有の国難にさいし、「印仏」が高級貴族の沙汰による御祈の場で制作された事実をあきらかにする点で、その歴史的意義は大きい。

【註】

1. 相田二郎『蒙古襲来の研究 増補版』吉川弘文館、1982年(初版は1958年)。
2. 『勘仲記』は『史料纂集』本を使用した。
3. 加須屋誠「「まなざし」の歴史学—王法と仏法の絵画史」(『日本美術全集』8 中世絵巻と肖像画、小学館、2015年)、拙稿「鎌倉時代の院政と宗教美術」(増記隆介・皿井舞・佐々木守俊『天皇の

美術史』1 古代国家と仏教美術、吉川弘文館、2018 年)。

4. 森本公誠「真言院四天王像内発見 蒙古軍撃退願文をめぐって」(東大寺教学部編『東大寺諸尊像の修理』毎日新聞社、1994 年)、註 3 拙稿。
5. 「印仏」「摺仏」の用例については、拙稿「仏教版画の呼称について」(『町田市立国際版画美術館紀要』15、2011 年。『平安仏教彫刻史にみる中国憧憬』中央公論美術出版、2017 年、所収)を参照。
6. 「印仏」「摺仏」の技術的相違を明確に指摘した早期の研究に、大屋徳城「印仏印塔考」(『寧楽』13、1930 年)がある。
7. 伊東史朗「板彫像の再検討」(『仏教芸術』150、1984 年)、田邊三郎助「古代の`印仏、について」(『国立歴史民俗博物館研究報告』3、1984 年。『田邊三郎助彫刻史論集』中央公論美術出版、2001 年、所収)、拙稿「入唐僧と檀印」(『アジア遊学』132、2010 年。註 5 拙著所収)。
8. 丸尾彰三郎「納入品としての印仏・摺仏」(丸尾彰三郎ほか編『日本彫刻史基礎資料集成 平安時代 造像銘記篇』第 4 巻 余録、中央公論美術出版、1968 年)、拙稿「覚音寺千手観音菩薩立像と納入印仏」(『美学美術史学』22、2008 年)。
9. 註 7 田邊氏論文。
10. 齋藤望「阿弥陀如来及び両脇侍像」(水野敬三郎ほか編『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇』13、中央公論美術出版、2017 年)。
11. 菊竹淳一「日本仏教版画概説」(菊竹淳一・兜木正亨・白畑よし・西村兵衛『日本古版画集成』筑摩書房、1984 年)。
12. 註 10 菊竹氏論文。
13. 註 3 拙稿。
14. 拙稿「〔五台山「一万文殊」像から蓮華王院千体千手観音菩薩像へ〕」(『岡山大学文学部紀要』65、2016 年。註 5 拙著所収)。
15. 『神道大系 神社編』40 厳島。この記事に言及する研究に、増記隆介「普賢菩薩画像論」(『普賢菩薩の絵画—美しきほとけへの祈り—』展図録、大和文華館、2004 年。『院政期仏画と唐宋絵画』中央公論美術出版、2015 年、所収)がある。

(付記)

筆者は大学院修士課程の 2 年生となった 1997 年 4 月より、学外者でありながら浅井先生にご指導を賜ることとなった。初めてお目にかかった日に密教彫刻の図像学的研究を勧めて頂き、『大正新脩大藏経 図像編』をつねに読むようご指導頂いたことは忘れられない。仏教版画史研究も先生の学恩があってこそ続けてこられたと思う。また、2008 年 4 月からの 1 年間、先生がサバティカルによりご不在にされたさいには、青山学院大学で非常勤講師を務めさせて頂き、学生指導のありかたについて詳しくアドバイスして頂くという得難い経験をすることができた。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

(岡山大学文学部教授)